

<b>Title</b>	短編映画を活用して英文読解を深める指導 : オー・ヘンリーの『最後の葉』の活用—
<b>Author(s)</b>	阿久津, 仁史
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢, 22(1): 155-164
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=1809">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=1809</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

〈研究ノート〉

## 短編映画を活用して英文読解を深める指導

——オー・ヘンリーの『最後の一葉』の活用——

阿久津 仁 史

A Study of the Effects on Reading Comprehension of Watching a Movie Based  
on a Short-short story

Hitoshi AKUTSU

The purpose of this study is to examine the potential of using a movie based on “a short-short story” to enhance reading comprehension after students had read the original story. The subjects of this study were 23 Japanese junior high school students. The material for research was a movie adaptation of “The Last Leaf”. The sources of the data are questionnaires given in class. In responding to the questionnaires, the students reported that they could understand the story more deeply after reading the story and watching the movie. The results show that watching a movie of a short-short story facilitates learners’ reading comprehension. The results also indicate that the students could better understand the English when it was spoken by the actors and actresses in the movie.

---

**Key words;** 短編映画, 英文読解, リスニング, オー・ヘンリー

### 1. はじめに

映画を活用した英語教育の実践は、高校・大学を中心として定着してきていると言って良いだろうが、中学生を対象とした実践はさほど多くはない。その要因はいくつか考えられるが、最も大きいものは、「シネマ・イングリッシュ」のような科目を開講できる大学や、教師の自由裁量に任せられる面が強い高校とは異なり、中学校の英語教育はあくまでも検定教科書を最後まで教えることが求められることが挙げられるであろう。

少ないとはいえ、中学校でも、選択の授業における実践の中には映画を活用した実践も散見され

る(二宮, 2002等)が, 週3時間の必修授業での実践は, 時間的制約もあり, 数が非常に限られてしまうのは否めないだろう。その時間的な問題を少しでも克服するために, 短編映画を活用して英文読解を深める指導を試みた。

## 2. 問題と目的

福永(1999)によれば, 英語教育における映画活用の意義として, ①自然な場面設定で英語学習ができる ②視覚からの理解により高度な学習が可能 ③言語材料が豊富 ④異文化理解を促進⑤ノンバーバル表現の理解も容易 ⑥モチベーションを高める 等が指摘されている。しかしその一方で, 現状では, 吉浦(2008)による指摘にもあるように, 中学生向けの映画活用の英語教育実践はさほど多くはない。今までの実践を概観すると, 多くは, 平野(1999)のように1回の授業の中で映画の一場面を見せて活用する実践が多く, 能勢(1999)のように映画全編を見せようとする, 授業を何時間も費やさなければならないため, 現在の週3時間の必修授業で検定教科書を用いている中での映画全編の活用は大変難しいという現状がある。

また, 滝口(2007)は, 映画を活用した英語教育の実践を, ①映画全体を使って総合的に学ぶ, ②映画全体を使って英語の背景を学ぶ, ③映画の部分を使って英語表現や感覚を学ぶ, ④英語の部分を使って4技能を学ぶ, ⑤複数の映画を使って英語表現や文化を学ぶ, の5種類に分類する一方で, 中学や高校では1本の映画全体を扱って英語教育の実践を行うことは難しい, という見解も示している。

しかし, 天沼(1996)の中で指摘されている, 映画を英語の授業で扱うための9つの基準である, ①リーディング教材を補うものとして使えるか, ②内容が豊かであるか, ③異文化理解を教えるのに適切であるか, ④言語理解の上で役立つ paralinguistic なヒントは豊富か, ⑤特定の文法教材として使えるか, ⑥ listening comprehension and/or listening perception の教材として使えるか, ⑦学習者の動機付けになり, 学習の効果があがるか, ⑧ speaking, listening, reading, writing の4技能を統合した教材となるか, ⑨英語の多様性を示す教材となるか, の中の第1の基準である「リーディング教材を補うものとして使えるか」という視点から考えた場合, 部分的に扱うのではなく, 何らかの形で映画全体を扱う方が教育効果がより高いのではないかと考え, 短編映画の活用を考えた。

というのは, 短編映画なら1回の授業で全編見せられるため, 複数回に渡って長編の映画を見るより, 登場人物や場面等を覚えておくという学習者への負担が少なくなる。それによって, 登場人物に対する感情移入の仕易さを通じた作品に対する深い感動が生じたり, 聞き取れた英文が記憶にも残り易くなることによって理解も深まるのではないかと考えられたためである。但し, ここで言う短編映画とは, Oberfirst(1948)による短編小説(Short-short stories)の定義である, ①新鮮なアイデア, ②完全なプロット, ③意外な結末, の3つの視点に準じるものとした。なお, 短編

映画を集めて毎年開催される「ショート・ショート・フィルム・フェスティバル」では、ジャンルを問わず 25 分以内の作品を短編映画と定義している。

しかし、ただ映画を見せるだけではただの映画鑑賞会になってしまい、教育効果が薄いと考え、英文読解をさらに深めるために見せることを目的とした。というのは、阿久津（1998）の中で言及されている『Free Willy』や『Dance with wolves』・『The Diary of Anne Frank』・『Stand by me』等を用いた実践からも分かるように、英文読解後に映画を視聴する方が、生徒の英文理解も深まり、感動も大きくなるのではないかと考えたためである。

そこで、オー・ヘンリーの『最後の一葉』を活用することにした。というのは、村山（2004）の中でもオー・ヘンリーの『20 年後』を用いた実践の教育効果が報告されているように、中学生にとっては、オー・ヘンリーの作品の、特に結末の意外性と感動が大変大きいためである。オー・ヘンリーによる中学生向けの英文読解教材としては、『賢者の贈り物』・『改心』・『20 年後』・『最後の一葉』等があるが、『改心』と『20 年後』は最後の場面の感動が大きい反面、ビデオの入手が困難で、『賢者の贈り物』はビデオの入手は可能だが、最後の感動が薄いように思われた。その一方で、『最後の一葉』はビデオの入手も容易である上に最後の感動も大きく、登場人物の名前や場面設定に関して映画と英文の違いもあるため、その相違点が視聴者を引きつけ易く、生徒も興味を持って映画を見ることが予想され、英文読解後に映画の視聴をする効果が大きいのではないかと考えたためである。

以上をまとめると、本研究では、次の仮説を検証することを目的とする。

仮説：英文読解後の短編映画の視聴により、両者の共通点や相違点等の内容理解が深まり、より感動も大きくなるであろう。

### 3. 方 法

#### 3.1 対象者

本研究の対象者は、東京都 A 区立 B 中学校の 3 年生 23 名（男子 11 名・女子 12 名）で、2008 年 1 月に行われた。学力レベルは、23 名中、英検 2 級取得 1 名、準 2 級取得 6 名、3 級取得 10 名という、中学生としては比較的学力が高い生徒が多かった。また、学年全体としては、2007 年 11 月に実施した東京都中学校英語教育研究会作成の英語コミュニケーションテストの結果は、語彙力が 15.8 点（15.0 点）、文法力が 15.4 点（14.3 点）、書く力が 10.6 点（9.7 点）、読む力が 15.3 点（13.8 点）、聞く力が 13.1 点（13.0 点）、合計が 70 点（65.8 点）であり（括弧内は東京都全体の平均点）、偏差値換算では、51.5 であった。また、中学 1 年次からの日本語による朝読書が続けた結果、『ハリー・ポッター』シリーズを読破した生徒も多く、読書に対するレディネスが高い生徒も多かった。

### 3.2 使用教材

使用教材は、開隆堂の昭和 56 年度版の『New Prince 2』の After twenty years と教育出版の平成 9 年度版の『One World 3』の The Last Leaf と 20 世紀フォックスから 1952 年に封切りされた O. Henry's Full House (DVD 『人生模様』) の中の The Last Leaf であった。

### 3.3 指導手順

まず、冬休みの課題として、『One World 3』の After Twenty Years を読ませた。次に冬休み明けの最初の授業で、After Twenty Years の逐語訳と解説をし、感想を宿題にして提出させた。2 時間目の授業で、The Last Leaf を友達と協力して逐語訳をさせた。3 時間目の授業で、The Last Leaf の逐語訳と解説を教員が行った。4 時間目の授業で、コンピューター室でヘッドセットを付けさせ、The Last Leaf の DVD の視聴をさせてから、ワークシートに取り組みさせた。

ワークシートの内容は、英文と映画の比較・英文と映画の違い・映画の中の英語・英文の感想・映画の感想、であり、それぞれの問いに対する答えとして、4. とてもそう思う 3. まあそう思う 2. あまりそう思わない 1. ほとんどそう思わない の 4 件法で答えさせ、その理由や感想を記述させた。

## 4. 結果

### 4.1 英文と映画の比較について

ワークシート中の英文と映画の比較の部分を TABLE 1 にまとめた。

この中で、他と比べて最も数値が高いものは、「⑤ Mr. Behrman が「ありのまま描け」と言われたのに、自分の信念を曲げてまで最後に忠実に実行したことが、映画の方が感じられたか？」という問いに対する 3.6 である。これは、英文にはほとんど書かれていないことであると同時に、映画視聴によってこそ Mr. Behrman が描いた絵の違いを視覚的に実感することができたことによる影響が大きいと、至極当然の結果であろうと考えられる。またそれと同時に、前述した天沼（1996）の映画を扱う視点である「リーディング教材を補うもの」として映画が機能した証拠とも言えるだろう。

2 番目に数値が高かったものは、「⑦英文を読んでから映画を見たが、その方が良かったか？」という問いに対する 3.4 であったが、その理由として挙げられたことは、「英文と映画はセットにするとうまく良くなると思いました。英文だけだと想像するのが難しいし、映画だけだと、英語が身に付かないと思うからです。」というものや「私は英文の方が好きです。映画だと肺炎になった理由がリアルすぎて……。でも映画には映画の良いところがありました。この物語の理解が深まったと思います。」というような生徒の感想からもよく分かるように、映画視聴によって、英文を読んでも理

TABLE 1 英文と映画の比較（4件法の平均）

①登場人物の名前や関係が異なっていたが、映画の方が良かったか	3.0
②季節や病気になった理由が異なっていたが、映画の方が良かったか	2.9
③白黒の映画でしたが、カラーの映画より良かったか	3.1
④英文だけでは分からなかったことが映画で分かったか	3.2
⑤ Mr. Behrman が「ありのまま描け」と言われたのに、自分の信念を曲げてまで最後に忠実に実行したことが、映画の方が感じられたか	3.6
⑥ Mr. Behrman が葉を描いたと教えなかった映画の方が良かったか	2.8
⑦英文を読んでから映画を見たが、その方が良かったか	3.4

n = 23

解が曖昧であった部分がより明確にもなり、より理解が深まったため、数値が高かったのであろう。

その一方で、最も数値が低かったものは、「⑥ Mr. Behrman が葉を描いたと教えなかった映画の方が良かったか？」という問いに対する 2.8 であったが、英文の方では、誰が葉を描いたかをきちんと教えていたのでやはり誰のおかげで助かったのかを教えてあげた方が良い、という意識が強く働いた生徒が多かったようである。

また、2番目に数値が低かったものは、「②季節や病気になった理由が異なっていたが、映画の方が良かったか？」という問いに対する 2.9 であった。これは、映画の中ではヒロインが失恋して肺炎になって寝込んでしまい、死にそうになったと描写されていたが、それは、現代の中学生にとっては、あまりにも非現実的で大きな出来事のように見えたのではないと思われる。

#### 4.2 英語の聞き取りやすさに関して

「英語は思ったより聞き取りやすかったか？」という問いに対する答えは、3.0 が平均（4件法）で、多くの生徒が聞き取りやすかった、と答えている。その理由としては、「意識して聞いてなかったけど、分かる単語を言っている時は気づいた」とか、「単語では結構たくさん聞き取れたけど、一文全て聞き取るのは難しい」や「少し早くて聞き取れない所もあった」、「知っている単語が多かった」、等が挙げられていた。

1950年代から1960年代の映画の中で話される英語は、最近の一般的な映画と比べてかなり聞き取りやすいことがよく知られている。それは、無声映画から有声映画になって間もないため、省略形や俗語等を使うことなく、視聴者の誰にでも分かるような英語を使うという意識が制作者や俳優・女優の側に働いた結果であると考えられる。現代の映画の中でも、ディズニーによるアニメーション映画等の中では、移民も含めて子供でも分かるように分かり易い英語が話されている、という事実と共通する点と言えるであろう。

そのような視点から考えても、今回視聴させた The Last Leaf の映画も 1950 年代の映画であり、

中学生にとっても比較的分かり易い英語が話されていたと推測される。

その一方で、英文と映画の違いについては、「英文は教科書用の文ということもあり、意味がどうしても分からない文はなかったけれど、映画の方が全く分からない単語や聞き取りも完全にできない文がいっぱい出てきた。字幕がないと到底分からなかった。」というような感想等もあり、映画視聴における英語の聞き取りの難しさを実感した生徒もいたようであった。

#### 4.3 印象に残った台詞に関して

映画の中の印象に残った台詞として挙げられた英文を TABLE 2 にまとめた。

下記のような英文が挙げられていたが、特に、He was a great artist. と As one leaf can do it, you can do it. の2つは複数の生徒が挙げていた。後者の台詞は、複文で比較的長いですが、本作品を理解する上で鍵となる文であったので、余計に印象深かったのではないかと思われるが、英語字幕は出ずに、日本語字幕しか出ないにもかかわらず、かなり多くの台詞を聞き取れたことには感心した。

しかしその一方で、聞き取ることが出来た英語の多様さが大きかった反面、印象に残った英文を一人一文しか書かせなかったため、実際に各生徒が聞き取れた英文の量を明らかにすることは出来なかった。予め上記の表をワークシート等に記載しておいて、聞き取れた台詞にチェックさせる等の方法でどの英語を聞き取れたかを把握するべきであっただろう。

TABLE 2 印象に残った台詞として挙げられた英文

① I can't.	1人
② I'm hungry.	1人
③ It's funny.	1人
④ I'm so tired.	1人
⑤ You can do it.	1人
⑥ Please be quiet.	1人
⑦ Love stopped.	1人
⑧ Don't you see?	1人
⑨ I ate them.	1人
⑩ He was a great artist.	2人
⑪ I'm a three-dollar painter.	1人
⑫ He painted his great picture at last.	1人
⑬ As one leaf can do it, you can do it, too.	3人

#### 4.4 英文の感想

英文を読んだ感想の代表的なものは、「私は、今まで本とかで英文と映画どちらを取ると聞かれたら、絶対映画派だった。でも今回英文を読んでから映画を見る良さを知れて良かった。」や、「絵が

ない自分分で想像できて良かった。訳すのは大変だったけど、訳せた時はとても嬉しかった。」「内容理解は文だと何度も読めるので結構できた。」や、「英文の方がストーリーが淡々と進んで面白味があった。」などであった。

前述したように、読書に対するレディネスができていた生徒が多かったこともあり、『最後の一葉』を読むまでに、教科書以外にもかなり多くの英文読解を行っていた。その中には、高校生向けの英語Ⅰの教科書に掲載されていた英語の文章や、アメリカの子供向けのマーティン・ルーサー・キング・ジュニアの伝記等もあり、中学生としては比較的難しい英文の読解に取り組んできた。そのため、今回のような比較的難しい英文の読解に対しても、ねばり強く取り組むことができたのではないかと考えられる。

また、短編とはいえ、まとまった物語文を英語で全編を通して読んだのは『20年後』が初めてであり、その最後の大どんでん返しが生徒達の心に強く焼き付き、同じ作家の作品である『最後の一葉』を読む動機付けと期待感につながったとも考えられるだろう。

#### 4.5 映画の感想

映画を見た感想の代表的なものは、「映画を見たことによって英文を読んだ時の想像とを照らし合わせることが出来て面白かった。」や「音が入ることによって場面や言葉が引き立って良かった。設定もリアルで少し聞き取れない言葉があっても内容が分かるのが映画の良いところだと思った。」「英文を読んでいたのでよく分かった。白黒だったのが良かったと思う。」などであった。

生徒の感想は、ほとんどが映画のみの感想ではなく、英文と比較してのものとなっていた。前述したように、ハリー・ポッター・シリーズを読破した生徒も多く、そのような生徒達は、皆、映画のハリー・ポッター・シリーズも鑑賞していた。しかし、彼らや彼女らはすべからく「本の方が良かった。」と異口同音に言っていた。これは、日本語で本を読んだため、理解が不十分な点はほとんどなかった一方、映画では上映時間の関係等で、細かい描写を省略したり、簡略化したり、設定を変えたりしたため、視聴した際に、「本と違う。」と感じて、フラストレーションがたまっていたためであろう。

ところが、本論では、母語である日本語で原作を読んでからその映画を視聴するより、外国語である英語で原作を読んでから映画を視聴の方が、より深い感動を得られることが明らかになったと言える。それは、「原作を読んでからハリー・ポッターの映画を見ると、英語で読んで分からなかった細かいことが分かるから、読まないで映画を見るよりずっと楽しい。」という原作を英語で読んだ大学生達の指摘と一致する点が興味深い<sup>(註)</sup>。

以上の結果をまとめると、①英文読解の後の短編映画の視聴を通じて、どちらか一方の場合より、一層理解を深めさせることができた、②映画と英文の様々な違いが分かり、それぞれの味わいや価値を感じさせることができた、③印象に残った英語表現は非常に多く、様々な英文が聞き取れたこ



とが分かった、となり、「英文読解後の短編映画視聴により、両者の共通点や相違点等の内容理解が深まり、より感動も大きくなるであろう」という本研究の仮説は、ある程度検証されたと言えるであろう。

## 5. 考 察

以上の結果を踏まえて、本研究の仮説がある程度検証された要因に関して、2つの点から考察を試みる。

### 5.1 『最後の一葉』の映画に関する要因

まず『最後の一葉』の映画自体の視点からの要因を詳しく考えてみると、①英文と映画の設定や登場人物名等の相違点があったため、生徒がその差を発見して味わおうとする意識が高かった、②1950年代の映画であったため、英語が聞き取りやすかった、③白黒の映画だったので逆に現在の中学生にとっては目新しく、正確な色が分からない部分は自分自身の想像力を膨らませながら視聴することが出来た、等の要因が考えられる。①と②に関しては、前述した通りであるが、③に関しては、映画の感想として「女優さんがきれいだった。」と書いてきた女生徒がいたが、恐らく、白黒の映画であったため、実物の肌の色以上に色白に見えて、より綺麗に見えたこともその遠因であろうと思われる。

### 5.2 指導上の要因

阿久津（2005）にもあるように、筆者の授業では、生徒達が日常的に文法の導入等で映画を視聴しているため、Ur（1984）で指摘されているような「（聞こえた英語は）全部が分からなくてはいけない」というような強迫観念を持っている生徒の数が少なかったのではないかと推測される。例えば、筆者の映画視聴を通じた文法事項の導入では、ターゲットとなる言語材料を含む英文の聞き取りに集中させ、そのためには不要な英語の聞き取りを一切強要していない。そのため、耳に入った英語を全て理解しようとする必要はなく、たとえ一部だけでも聞き取れた英語があれば良い、という意識がより強く形成されていたのではないかと考えられる。そのため、字幕付きの映画の全編を見るのにも抵抗が少なかったのかもしれない。

また、コンピューター室でヘッドセットをして各自がコンピューターのディスプレイを通じて映画を見たため、普通教室で小さいテレビの字幕を見ながら、スピーカーから聞こえてくる英語を聞きながら視聴するより、はるかに集中することが出来たことも指導上の要因として考えられるだろう。これは、学校内の教室不足という物理的な問題で、大画面テレビ付きの視聴覚室が確保できないため、普通教室のテレビでは字幕が見えづらいだろうとの配慮から取り組んだ結果であったが、

字幕付きの映画視聴に取り組む際に、今後も是非取り入れたい手法となったことは大きな収穫であった。

## 6. 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界としては、実験群と統制群を設けて、長編映画を視聴した場合と短編映画を視聴した場合を比較したり、映画視聴のみの場合と英文読解と映画視聴を組み合わせた場合との比較をしたりしなかったため、厳密な意味では、英文読解後の短編映画の全編を視聴した効果を検証できたとは言えない点がまず挙げられるだろう。また、「印象に残った台詞」という質問をしたため、実際にどの英文を聞き取れたかを把握出来なかった点もあるだろう。

それらの点は、そのまま今後の課題となり、実験群と統制群を設けるのが難しければ、同じ被験者に対して異なる手法を用いた指導を施し、どちらが効果があるかという測定をしたり、ワークシートを工夫して聞き取れた英語にチェックさせることにより、聞き取れた英語を数量的に把握する方法の模索等が今後の課題となるだろう。

さらに、日本で手に入る短編映画の数の少なさや、中学生の学力や発達段階に合うものの確保の難しさをどう克服するか等は、今後の大きな課題として残ると考えられる。

以上の他にも残された課題は多いだろうが、今後も、英文読解後に短編映画を視聴するその教育効果を検証しながら、その有効性を検証していきながら、より効果的な英語指導法を模索していきたい。

(注) 本大学における複数の学生の見解である。

\* 本稿は ATEM (映画英語教育学会) 第 14 回研究大会 (2008 年 6 月 21 日於創価大学) で行った口頭発表に加筆・修正を加えたものである。

### 引用文献

- Oberfirst, Robert (1948) *Short-Short Stories* B. Humphries.  
Ur, Penny (1984) *Teaching Listening Comprehension*, Cambridge: Cambridge University Press.  
阿久津仁史 (1998) 『笑顔がいっぱい 人間らしさを大切に英語の授業』三友社出版。  
阿久津仁史 (2005) 『英語の授業づくりアイデアブック 8 中学 2 年 自己表現とコミュニケーション』三友社出版。  
天沼えり子 (1996) 映画を使った英語の授業計画『映画英語教育研究』第 2 号 映画英語教育学会。  
福永保代 (1999) 外国語の授業に映画を活用する意義と方法『新英語教育』3 月号 三友社出版。  
平野寿美 (1999) 「ノートルダムの鐘」を使って『新英語教育』3 月号 三友社出版。  
村山功 (2004) 教科のおもしろさを味わう授業—「学ぶ意欲」が育つ授業の手だて—明治図書。  
二宮正男 (2002) 映画を Pre-Reading として利用した授業—NEW CROWN 3 年 LET'S READ 2\*Fly

短編映画を活用して英文読解を深める指導

- “Away Home”において—『NEW CROWN 授業通信』15 三省堂.
- 能勢英明（1999）映画で英語はいかがですか『NEW CROWN 授業通信』三省堂英語教育・中学編別冊  
第2号 三省堂.
- 瀧口優（2007）映画英語教育のすすめと課題『英語教育』11月号 大修館.
- 吉浦潤次（2008）英語の学習における映画の効用『新英語教育』2月号 三友社出版.